

6月上旬、ももたろうクリニック(岡山市南区妹尾)の駐車場で、一組の親子がマイカーに乗ったまま待っていた。新型コロナウイルスのPCR検査を受けるためだった。

防護服にフェースシールドを着用した森茂院長と看護師が車に近づき、38度の熱でもうろうとすると1歳の女兒から検体を採取した。

「検査結果はあした連絡します。変わったことがあればすぐに知らせてくださいね」。心配そうにわが子を抱く母親。20代に森院長は優しく声を掛けた。

同クリニックは岡山市からの要請に応じ、自宅で療養する陽性者が急変した場合、電話で状況を聞き、薬を手配したり診療したりする態勢を整える。同市保健所職員が自宅療養者に定期的に行っていた健康観察を、地域のかかりつけ医が担う同市独自の取り組みだ。

岡山市の仕組み

今年1月から始まった流行第6

選択2022
参院選

地域の課題

① 新型コロナ対応



子どもにPCR検査を行うももたろうクリニックの森院長。急変時にも対応できる態勢を整える＝岡山市南区妹尾

波は約1カ月後、全国の自宅療養者が過去最多の57万人に達した。各保健所は疫学調査や療養先の決定などに加え、健康観察を担当。職員総出の電話連絡は連日続き、どの保健所も機能不全に陥りかけた。

岡山市も例外ではない。2月上旬には最多の3300人を記録。他部署からかき集められた54人が50の電話回線を駆使して対応したものの、「電話がこない」といった批判の声が市民から上がった。

「電話をかけてもかけても見えない。私たちもパンク状態でした」。同市保健管理課の藤田求課長補佐は振り返る。

健康観察は自宅療養者の急変にいち早く気づき、入院・治療につながる重要な役割を持つ。昨年春から夏の第4、5波では療養者への連絡が滞り、自宅で容体が急変して亡くなるケースが大都市圏で相次いだ。そうした事態を避けようと、同市は4月から仕組みを変えた。

保健、医療の将来像は

「かかりつけ医は患者や家族の状況をよく知っている。関わる意義は大きい」と指摘するのは、岡山県感染症対策委員会委員を務める頼藤貴志・岡山大大学院教授。

「保健所にとっても重症化リスクがある人の支援やクラスター(感染者集団)対策に職員を集中的に配置できるメリットがある」と話した。

ウイルスと共存

岡山市のような仕組みが全国へ広がるきっかけになるかもしれない。政府は経済財政運営の指針「骨太方針」で、新型コロナ対応について「かかりつけ医機能が発揮される制度整備を行う」と明記した。

本格的な検討はこれからだが、かかりつけ医にとっては気掛かりな点もある。

診療所という限られたスペースでは、感染者と非感染者の活動領域を分ける「ゾーニング」が取りづらかったり、少ない医師や職員

の感染で一般診療に支障が生じたりする可能性がある。そもそも市民の中には、かかりつけ医を決めていないという人も少なくない。

「ウイルスとどう共存していくかを考える局面に入っているのは確かだ。感染が落ち着いている今こそ、保健所機能の強化、かかりつけ医の在り方を含めた医療の将来像を探る議論が欠かせない」。川崎医療福祉大の浜田淳特任教授(医療政策)は注文する。(井上光悦)

22日公示、7月10日投票の日程が想定される参院選は各地で前哨戦が活発化している。長引くコロナ禍への対応をはじめ、地方創生や子育て支援といった課題を地域の現場から検証する。